

諏訪小だより

令和4年11月30日

12月号

多摩市立諏訪小学校

校長 齋藤 幸之介

「コンタクト」

—ある小学生がサッカーをする姿から—

校長 齋藤幸之介

先週の学校公開及び道徳授業地区公開講座には多数御参観くださり、ありがとうございました。昨年度に比してわずかであったかもしれませんが、多くの時間を御参観いただけるように工夫をしたつもりでございます。新型コロナウイルスの感染が「第8波」に入った、と言われるように、再度拡大している中での実施となりましたが、頂戴した御意見を参考にしながら今後さらに改善を図ってまいります。

さて先日、校長室からある学校の4年生がサッカーの試合をしている様子が見られました。指導者の指示は穏やかながらも端的で分かりやすく、子供たちも主体的にゲームを行っている様子が素敵であると思いました。前半終了間際に相手が蹴ったボールをキーパーが横っ飛びで捕ろうとしました。それを見ていたチームメイトが「あれはいらないかも」「飛ばなくてもよかった？」と声をかけていました。素直な意見の交換からもチームのよさが伝わってきました。

コンタクト=接触、そして関係

そのとき、私は「コンタクト」という言葉を思い浮かべました。ラグビーなどでは相手とぶつかるそのシーンを「コンタクトプレー」などと言いますが、また、例えば「アイ・コンタクト」、つまり互いの目線・目配りによってチームメイトと戦法を確認してプレーをすることがあることは多くの方々にご存じかとも思います。声をかけて味方のプレイヤーに位置を確認することもあります。一人一人の技を大切にしながら、仲間との関係によって大きな成果を上げる大切さを、先程紹介した子供たちは私に示してくれたのでしょう。

「身体性拡張」

今から20年程前、私はある体育科学習の研修会に参加をしました。そこで学んだことの一つが「身体性拡張」でした。例えば、ゴルフはボールをクラブという道具で打って飛ばします。このときのクラブはもちろん道具ですが、この道具は打つ人の意思、具体的には「どこまで飛ばそうか」や「どの方向に打とうか」という思いやねらいを叶

えるために用いられます。さらに、繰り返し練習をすることを通し、いずれクラブを自由自在に扱えるようになり、クラブという道具が「人間の体の一部」になった、と認識されることがあります。つまり、道具が身体化される、ということなのです。

当時御指導くださった先生は、ボールも同様に考えられる、とおっしゃいました。サッカーで正確に蹴り出されたボールは、キックをした選手の体から離れますが、思いやねらいが込められてチームメイトに届きます。現在開催中のワールドカップサッカー大会でも、世界の一流のプレーに身体性拡張が具体化された技を見出し、学んだり心を躍らせたりできるのかもしれません。

様々な場面で、身体性拡張によって多くの仲間と結び付くことができます。そして、これは単なる関係ではなく、大きな興奮や喜びという感情やさらなる期待をもたらす、と思うのですが、いかがでしょうか。

様々な「道具」を用いる姿を考えながら

当たり前のように使われているICTの意味は情報通信技術であります。狭い見方をすれば、「相手と情報のやり取りをする道具」とも言えましょう。

先日、1年生が市内の研究会で授業を公開する機会がありました。この学習の中で、子供たち一人一人がデータを送信し、これを互いに共有して「バスの仕事とそのためのづくり」についての気付きを深めました。タブレット端末をそれこそ自然に活用する姿に子供たちの順応性の高さを改めて認識するとともに、「Aさんから、バスのタイヤの特徴を学んだ」「Bさんは、バスに手すりがあることを調べていた」と、関わりを通して学びを深める大切さを再確認できました。

ともすると道具を活用することにとらわれがちな昨今、「そもそも」を忘れずにこれからを模索し続けることが学校に問われていることを改めて感じています。